

あかえびと

97号（新会堂建築・白根新治名誉牧師追悼記念）2018年3月発行

日本バプテスト同盟金沢文庫キリスト教会

〒2360046 横浜市金沢区釜利谷西 3-36-20

牧師 森島牧人・森島 恵 電話 045-783-5475

e-mail: church.kanazawabunko@gmail.com

[http:// kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp](http://kanazawabunkochurch.sun.bindcloud.jp)

故白根新治名誉牧師 告別式 2018.2.3

説教「主と共に生きる」

金沢文庫キリスト教会牧師 森島牧人

聖書 旧約聖書・詩編 第23篇 1～6節

【賛歌 ダビデの詩】

主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることが
ない。

主はわたしを青草の原に休ませ

憩いの水のほとりに伴ひ

魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく わたしを正しい道
に導かれる。

死の陰の谷を行くときも わたしは災いを
恐れない。

あなたがわたしと共にいてくださる。

あなたの鞭、あなたの杖それがわたしを力
づける。

わたしを苦しめる者を前にしても

あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

わたしの頭に香油を注ぎ わたしの杯を溢
れさせてくださる。

命のある限り 恵みと慈しみはいつもわた
しを追う。

主の家にわたしは帰り 生涯、そこにとど
まるであろう。

いま、私共はここに集まり、白根新治先生
を囲み、故人となった先生に別れを告げるそ
の祈りの時、告別式をもっております。この
式は、神の御前にあって故人を懐かしみ、故
人との出会いを感謝しつつ、同時に神の慰め
を祈る時でもあります。

この式での故人の死を惜しむ深い悲しみ
は、ご家族と教会の家族にとどまりません。
ですから本日のこの式は、多くの卒業生・保
護者・友人・知人の方々、また様々なかたち

で白根新治先生に愛され、白根先生を愛する
私どもすべてにとって、いま必要な神の慰め
を戴くためでもあります。

しかし、本日私がここに立っておりますの
はそれだけではありません。ご遺族の思いが、
つまり、この式をもって「人の思いではなく、
神を賛美する葬りの式を行いたい」との願い
を受け、その思いの依頼を受けてここに立っ
ているからであります。ですから私として、
また私たちの教会、金沢文庫キリスト教会と

しては、白根新治先生の60年間以上になる宣教の歴史を覚え、また、ご自身の78年間の信仰の生涯を終えて召されました金沢文庫キリスト教会の白根新治名誉牧師を覚えて、共にここで礼拝を守りえますことを感謝したいと思うのであります。

というのも、三名の方の白根先生への「記念の言葉」の中にありますように、既に召された白根新治先生は、第一に、日本バプテスト同盟金沢文庫キリスト教会の牧者でありました。そして同時に、先生は関東学院の教師・チャプレン（学院の牧師・校長・園長）として、つまりキリスト者として、キリストの兵士としてこの世での働きを終え、神の御もとに召されたのであります。まことに、あっぱれな一生でありました。

白根先生は、略歴にありますように、2017年12月25日(月)20時19分、入居中の（医療法人社団景翠会）「ふるさと」にて召天されました。享年94歳でした。先生のこの生き方、否、死に方は、今後も語られていくと、私は思います。人の死に方こそが、その人の生き方を表すからであります。先生が60余年牧師として宣教されていた金沢文庫キリスト教会では、新会堂建築を計画しておりました。昨年のクリスマスには、新会堂で白根先生と共に主のご降誕を祝う礼拝を守ろうとの願いで、教会員一同、全体で、また業者の方々にも頑張っていたいただき、新会堂の竣工の時を着々と進めて参りました。2017年11月30日、念願であった金沢文庫キリスト教会新会堂は完成しました。12月17日には、関東学院大学生のバプテスト式がありました。先生はそこにおいで下さり、彼のために、教会のために、お祈りをして下さいました。さらに、次週も、24日の金沢文庫キリスト教会の新会堂での最初のクリスマス礼拝にも出席して下さいました。その主のご降誕の祝いの礼拝を終えたその次の日、つまり12

月25日、クリスマスの日に天に召されました。これまでの先生の牧者としての人生の象徴でもあった、主の教会を、また、先生が愛されてきた教会員のその働きを見届けて、先生はみ国に凱旋されたのであります。教会では、先週の1月28日に、この新会堂の献堂式を致しました。その礼拝堂は、白根先生のお働きを記念し、「**白根新治記念礼拝堂**」と呼ばれます。先生の生涯は、まことにあっぱれ。先生をひと言でいえば、神のみ旨に生きた「キリストの兵士」です。本日は、キリストの兵士の凱旋の時なのであります。この機会に先生の信仰の歩みを覚え、また、私たち自身の与えられた人生の歩み方について、共に、聖書の中から聞いて行きたいと思えます。

白根新治先生は「優しい方」でした。どんな方にもあふれる笑顔を向けてくださる方でした。見ているこちらのほうまで嬉しくなってしまう、あの大きなお声と笑顔を向けてくださいます。いつでも歓迎して下さる。自分を受け止めてくれている。そう感じさせるお人柄でした。そして、どんな時にでも感謝の気持ちを忘れないお方でした。ですから、もし白根先生が今ここで皆さんに語る事が出来たとしたら、きっと「ありがとう」と言われるのではないかと思います。「来てくれてありがとう。」と、「出会ってくれてありがとう。」、「今まで一緒に耐えて過ごしてくれてありがとう」と。そしていつもその根底で神様ありがとうございますと、感謝の祈りをささげておられたと思えます。そのように心から言えることは、本当に素晴らしいことで、幸せなことなのであります。

さて、白根先生が最も愛された聖書の言葉の一つは、今日共にお読みいたしました詩編23篇の御言葉でありました。この詩編23篇は、旧約聖書に出てくる偉大な人物、ダビデ王の信仰の歌です。この人物は、旧約聖書の中でとりわけすぐれた人物の代表として讃

えられている人物です。もし人類に救い主が現れるとしたらこの人の子孫に違いないとまで言われた名君、それがダビデであります。天からかけ降りてきたような美しい風貌。王としての政治・経済・軍事、多面にわたる力量。琴を奏で、詩をつくる芸術的力量。あらゆる面において、ダビデにまさる人物はいなかったのです。

しかし、それほどの人物が死んだ時、しかも一国の王として死んだにもかかわらず、その葬儀において、彼はこのように紹介されました。「ダビデは、その先祖と共に眠って、ダビデの町に葬られた。ダビデが、イスラエルを治めた日数は、40年であった。すなわちヘブロンで7年、エルサレムで33年、王であった。このようにして、ソロモンは、父ダビデの位に座し、国は堅く定まった」（列王記上2章10～12節）。わずか3行半、これがすべてです。これ以上のことを紹介させなかったのです。王ダビデは、自分の葬儀の日、自分の栄光が数え上げられ自分の業績が数え上げられることを許さなかったのです。何故でしょうか。

彼は自分が何者であるかよく知っていたからです。彼はもともと、平凡な一人の羊飼いでした。人間的に言えば、一介の羊飼いが一国の王にまで立身出世の階段を駆け上った輝ける人物です。しかし彼は王となってからも、自分を決して見失いませんでした。彼は、神の前には、自分はただの羊飼いで、いやただの一匹の羊にすぎないと自覚していました。その自覚、神の前での自分の姿を、ダビデは美しい一片の詩にあらわしたのであります。「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。」と。

本当は、私どもは乏しいところがたくさんあるのです。愛が貧しかったり、思いやりがなかったり、勇気に乏しいこともたくさんあるのです。欠けているものがたくさんあるの

です。挫けそうなことは幾らでもあるのです。けれども「わたしには乏しいことがない」と言えるのです。「主が、私の牧者であるからです」。

牧者というのは、羊飼いのことです。弱い羊が一人では何もできず、オオカミでも出ようものならばすぐに食べられてしまう羊が、生きていかれるのは、羊飼いが一緒にいて守ってくれるからです。いのちがけで闘いから守ってくれるのが、羊飼いです。

この信仰の詩人は、祈りの中で歌うのです。神さまが私の羊飼いだから、わたしには乏しいことがない。欠けているものがない。すべて欠けているところは満たされている、と。

「主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる」と。生きていく時に、必要な食べものがあるところ、それがみどりの牧場です。そこに、神が私を置いて下さる。わたしは貧しくなんかない。心から憩うことが出来るところ、休むことが出来るところ、そこに導いて下さる。そこで魂を生き返らせて下さる。疲れた魂を、挫けた魂を、いつでもいのちを吹き返して甦らせて下さる。正しい道に導いて下さる。

「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも」と。生きている中で、誰でも死の陰の谷を歩むことがあるであります。真っ暗で先が見えず、一步道を外せば転がり落ちてしまいそうな、不安な道を歩むことだってあるでしょう。色々なことが言えますが、誰でもが必ず経験することは、死ぬということでありましょう。この中におられる方の中で、死なずに済む方など一人もいないのです。必ず、死の影の谷を歩むことがある。けれども、その時でも恐れる必要はない。

「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れませんが、あなたがわたしと共におられるからです。」と。神と共にいて下さる。だから恐れる必要はないのです。私ど

もはただその方の後ろに従って行けばいい。その方が、永遠の命という素晴らしい希望へと導いて下さる。

「あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます」と。この杖と鞭は、羊を痛めつけるためのものではないのです。羊飼いは、暗い谷を歩まなければならない時、本当に暗くて、分からない道を歩まなければならない時、杖や鞭を地面にたたきつけて、音を出しながら歩くそうです。羊は、その音を聞くと安心するのです。暗くて孤独を感じる時、従いたい羊飼いの姿が見えない時、いつでも音が聞こえる。羊飼いの音が聞こえる。バンバンと、叩く音が聞こえる。その音を聴きながら、近くに羊飼いがいると感じて、深い慰めを得ていたのです。

白根新治先生が、常に支えとしておられたのは、この信仰ではなかつたろうかと思えます。そして、教会の中で、教育の中で、信仰生活の中で、多くの出会いの中で、人々に伝えたかったこともこの恵みであったと思えます。

神が、共にいて下さる。その喜びに生きてもらいたい。絶えず祈りをもって、生きても

らいたい。どんなときも、感謝の心に生きてもらいたい。神と共にいて下さるのだから。御言葉を聞いて、目で見るとも確かに、心に神を感じて生きてもらいたい。

ですから白根先生は、きっと今、こう語られたのだと思います。この主の御前で、また会おう。この主のみ前で、また会う日まで、主があなたと共にいまして、あなたの行く道を守られますように。

白根先生は、この主イエス・キリストに全てを委ねられました。残された者達に、キリストへの信仰を残し、その主に全てを委ねられました。私どもも、白根先生のすべてを、この主に委ねましょう。人間は生まれたときと同じく、死ぬときも地上の何ものも持っていくことは出来ません、と言われます。しかし白根先生は、信仰を持っていかれました。

キリストの十字架の愛、裏切ることのないこの愛によって、罪の赦しを与えられ、確信しその生涯を主に委ねて、安心して旅立ってゆかれました。このキリスト者の生き方を、私共は心に刻み、主に栄光を歸し、お別れをしたいと思うのであります。

「お城のような新会堂」

「わぁー、お城みたい！」 新会堂に入るなり、孫が喜んでくれました。そしてその暴れん坊の孫が、静かに礼拝に参加してくれました。

嬉しくて、嬉しくて。神さまから託された小さな孫をどのように育て導くことができるでしょうか。主にお願ひするほかありません。

たしかに、孫の言うように、王なる主・イエス様のお城です。恵と慈しみに富むお方が、私たち一人ひとりに全てを分かち与えて下さる主のお住まいです。

小さき者、弱い者のみかたであり、全てを

西山律子

ご存じの主が、いつも共にいてくださる。何でも相談できる、天のお父様。悲しいこともつらいことも喜びに変えて下さる主。

子育て中の若い人や幼子から大人まで、ゆったりとくつろいで、お茶を楽しむことができるようにと、4月からチャーチカフェを開きたいと思っています。

金沢文庫キリスト教会の楽しい集まり、そこに参加して下さる近隣の方が増し加えられますように、皆で力を合わせ、楽しい企画を立ててそれを実現していきたいと思っています。

「白根新治先生と新会堂献堂の歓び」 羽入田 毅

2017年12月25日に天に召された先生が私に残された事は何かと自問しました。先生はその前日のクリスマス礼拝にご家族に伴われて車椅子に乗って出席されました。新会堂での初めてのクリスマス礼拝は主の祝福に満ちあふれていました。見えざる神のご臨在があったのです。釜利谷の丘の教会堂は倒れることがない、岩の上にたてられているからとの確信を得ました。

嘗て教会の56年史の編纂のお手伝いをした時に、教会週報第1号から欠落部分を除いて56年分を具に読む機会に恵まれました。その中の1961年から62年の週報に先生の「信仰自叙伝」が連載されてありました。当時73歳でバプテスマを授けられたばかりで聖書の森の中を逍遙する私にとって道しるべに出会えたようなものでした。それから時は移り白根先生の希望通りバプテスマの伝統を引き継ぐ牧者として現在の森島

牧人・恵牧師が立たされました。その森島牧師夫妻の下、旧会堂の老朽化対応と地域社会への宣教の砦として新会堂建設の願いを立て、当教会に心を寄せて下さった方々にも祈りとご協力をお願いをして献堂の運びとなりました。誠に初めから最後まで神の御業です。

2018年1月28日の献堂式の準備・片付けの折りに「信仰自叙伝」を拾い読みしました。(1961・9・10の週報から)「信仰生活で一番恐ろしいのは独断に陥る事であろう。そしてそこからいつのまにか信仰的傲慢になることである。自らは罪人の頭であるのに、その意識が免疫になるとキリストを必要としなくなる。キリストを後退させて自分が前面に出てくる。・・・」

改めて自戒して聖書に立ち戻り、神を畏れてこの新会堂を神の栄光のみ誇るものとして行きたいと思っています。

「白根先生から学んだこと」

白根先生にご指導いただいたのは15年ばかり前に金沢文庫教会にお世話になってからですが、バプテスト派の教会であるということは殆ど意識しなかったように思います。教会員の方々の多くはいろいろな違う教派の教会から来られていました。私自身は終戦直後、兵庫県明石市にある「人丸教会」で洗礼を受けたのです。この教会は英国宣教師バックストーンが松江で宣教を始め、神戸市にも拠点を設定したということで超教派の「日本伝道隊」を組織されたものです。

白根先生がおられた関東学院の初代院長坂田祐氏は内村鑑三に師事されたと聞きます。白根牧師は、教文館では財務状況が悪くなると内村鑑三全集を出版するんだそう

梅谷興三

など笑いながら話されたのを覚えています。

ところでバプテスト派は個別教会主義をとって個々の教会の自主性を尊重する特色があるといわれています。教会の自主性を尊重するということは信徒の自主性を尊重することに行きつきます。このことは信徒にも責任があるということになります。

当教会での2018年度の宣教課題の中に『霊的成長』があげられていますが、まさに時機にかなったものと云えるのかもしれませんが。

私は白根名誉牧師が無教会派だったといっているではありません。どんな人であっても手を広げて迎える姿勢を学んだのです。

「高らかな祈りの声は今も」

羽入田悦子

私共家族は30数年に亘り、白根新治先生にお世話になりました。母と私の転入会、父の病床洗礼、父母の葬儀、そして5年前の夫のバプテスマ。これらのすべてを先生にお導き頂きました。感謝でいっぱいです。

私が先生とお近しくさせて頂きましたのは先生が80歳近くでおられる頃で、柔和で慈愛に満ちた老牧師という印象でいらっしゃいました。主日礼拝、水曜集会を通しお導き頂きましたがその中で、先生はパウロが好き、アウグスティヌスが好き、ルターが好き、内村鑑三が好きでいらっしゃるのだなあと思いました。と申しますのは、この方々の信仰についてお話しになる時の先生はとても熱くていらしたからです。生来穏やかなご性格の先生、激しく雄々しく信仰の歩みを貫かれた先達の方々に憧れ、羨ましく思われているのだらうなあとは私は考えたのでした。ところが色々な方から私の存じ上げない時代の先生のご様子をお聞きするに及び、私の考えは間違っているらしいことが分かりました。それは例えば、釜利谷の今の地に教会をとの計画に対し、反対の声が圧倒的であったにもかかわらず、決然として一步も引かれず、貫かれた後は完成を目指してのあらゆる労を厭われなかったといった類のお話でした。そこに拝見しますのは、悲しみの中にいる人にどこまでも寄り添おうとなさった先生とはまた、全く異なった激しく雄々しい、そして頑固な先生の姿でした。私は密かに認識を改めさせていただいたのでした。

聖書をひもとく会や家庭集会でも多くのお話を伺いました。沖縄への深いお気持ちも幾度もお聞きしていますが私の心に特に強く残っていますのは、関東学院中等部でのお幸せな少年時代のお話でした。坂田 祐先生をはじめとする優れた先生方との出会いと交流。その学びの日々が少年の自分にとって

どれ程恵みに満ちたものであったか、先生はいつも遠くを見る眼差しでお語りになりました。そしてその幸いな時間のすべては神の一方的な祝福そのものであったと繰り返されました。この学び舎でのお話をお聞きする度に、私はご一緒に学ばせて頂いていたかのような不思議な幸福感に包まれたのでした。このような年月を過ごされた後の関西学院大学の学生時代に先生は第二次世界大戦に巻き込まれ、軍隊生活を経験なさることになります。一軍人としての辛い体験についてもお話下さいましたが、今思いますとそのような状況の中で、先生は掛け替えのない中等部での日々を心に抱きしめて生きておられたのではないかと、更に恵みに満ちたあの年月は先生の心の中で温かな光を放ち続けて、良き牧者としてのご生涯を支えたのではなかったかとの思いを持たせて頂くことでございます。

この他、懐かしい思い出としましては、聖書をひもとく会のメンバーで色々なところへご一緒したことです。先生はそれを大変お喜びになりましたし、私共も遠足気分道中聖書のお話を伺ったりしながら楽しくご一緒しました。中でも久保田兄の車に7,8人が乗せてもらい、江戸の殉教地跡巡りをしましたこと。後日先生は「あれはよかった」と何度もおっしゃっていました。処刑場跡で捧げられた先生の鎮魂の祈りが今も耳に残っています。その他、新島襄の安中教会、みなとみらいでのヘボン展等々。会場から出て来られないのを心配して戻ってみると展示資料の前で動かない先生を見つけること度々でした。コストコにも何度かご一緒しましたが、クリスマス前の混雑の中で先生と逸れ、みんなで必死にお探ししたことなど、楽しい思い出は尽きることはありません。

多くの人々を愛し、多くの人々に愛され、

慕われ、神から託された使命をすべて果たして、先生は主のみもとにお帰りになりました。大きなお声で祈っていただけませんこと、本当に寂しく思いますが、神は50年近く前、金沢文庫教会の誕生と同時にその文庫教会で伝道師として出発なさいました森島牧人・恵ご夫妻を、先生に続く私共の牧者としてお立て下さっています。私共教会員一同森島牧

師お二人と共に、神が白根先生に託されました宣教の砦としての金沢文庫キリスト教会をしっかりと受け継ぎ、宣教の旗を高く掲げて働いて参りたいと願っています。今も聞こえる先生の高らかな祈りの声に励ましていただきながら。

【2月3日(土) (於清水ヶ丘教会)

白根新治葬儀記念の言葉】

「満ち足りた人生」

白根義輝

父は、2016年11月30日、肺炎のため金沢病院に入院いたしました。その後、2017年3月8日に退院し、リハビリのために、私の家から徒歩5分の所にあります介護老人保健施設「ふるさと」に入所いたしました。2010年に召された母も、数年お世話になった施設です。父は施設がとても気に入り、職員の方々からきめの細かい介護をしていただき、平安な日々を送っていました。

そして、父が心待ちにしていた新会堂が、11月に竣工し、12月10日から礼拝ができる環境が整いました。父は、愛する孫に助けられながら、17日のバプテスマ式、24日のクリスマス礼拝に出席し、共に礼拝を守ることができました。その翌日、25日に静かに天に召されました。

ルカによる福音書に、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なないとお告げを受けていたシメオンが、幼子の主イエス・キリストを腕に抱き、神をたたえて言った、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目でああなたの救いを見たからです。」という記事があります。新会堂完成の喜びを味わった父もシメオンのように、正に、なすべきことは全てやり終えた、思い残すことは何もない、本当に満ち足りた人生だったという境

地だったと思います。

25日、いつものように夕食介助に訪れた時、ベッドで天を仰いで両手を組み、お祈りの姿勢で休んでいました。いつも讃美歌を流していましたが、丁度その時、434番「主よ、みもとに」に続いて465番「神ともにいまして」が流れてきました。今にして思えば、父が別れを告げたのではないかとさえ思われてなりません。夕飯は、お茶をスプーンで一舐めしただけで、私が帰宅してから1時間後に召されました。

復活と永遠の命に与る希望がありながらも、涙が涸れる時が来ないのではないかと思うほど悲しみは深いものでした。なぜなら、親子としての関係はもちろんです、26歳の時、父からバプテスマを受けてから40年間、牧師と信徒としての関係があったからです。

父は若き日にイエス・キリストに捉えられ、喜びや悲しみ、多くの困難など紆余曲折がありながらも、長い間伝道者として歩み続けられたのは、神様の守りと導きがなければ到底できない業です。

2か月が過ぎ、やっと精神的にも肉体的にも癒された今、改めて父のように、忠実な僕よ、よくやったと祝福された道を歩んでいきたいと思っています。

「白根先生を偲んで」

白井豊子

白根新治牧師は、最後の最後まで伝道の人でした。神は存在することを身をもって教えて下さいました。神に喜ばれるような隣人への愛と感謝の生き方を貫かれた白根先生。神がみもとにサーっと連れていかれましたね。

前夜式の日、息子さんたちが語っていた話は心に残るものでした。特に最後の25日の夕刻、お別れの前の話は衝撃的でした。

いつもの様に夕食前に訪れた息子さんに「食べたくない」と意思表示をし、その日は手を組み祈りの姿勢になられたとの事。その時カセットテープから讃美歌「慈しみ深き友なるイエスは…」が流れており、帰り際には「神共にいまして行く道を守り…」の曲が流れていたそうです。息子さんは語ります。「今思うと、前夜式の讃美歌そのものであり、準備していたのだ」と。「その1時間後、ひと呼吸でスーッと息をひきとっていかれた」とホームの職員は語ったそうです。

17日のバプテスマ式の日も、前日の24日のクリスマス礼拝にも先生はこられました。私は両日とも先生の隣の席に座っていました。バプテスマ式では先生は常に「アーメン」と小さな声で唱え続けておられましたが、翌週のクリスマス礼拝では時々苦しいのか低い呻き声をあげていらっしゃいました。しかし目はしっかり

と見開き、周囲を見回していらっしゃる事が多くありました。きっと教会の皆さんとのお別れの挨拶かもしれません。

イエス様の誕生を記念する日と先生の召天の日が重なったのは神のなせる業であり、信仰の人・白根先生へのご褒美なのですね。

御長男が語りました。「父は愛し、愛される人でした。『退院して早く家に帰らなくてはいけない、きっと困っている人が相談に来るから』このことが父の長く生かされてきた基になっていたのだと思うのです」と。

ホームに入られ、先生は過去のことは忘れることも有りましたが、今という瞬間に限りなく真実に生きておられると思わされました。

12月2日、母と共に見舞いに行くと「石巻からわざわざ有難う。申し訳ない」と涙して喜んで下さいました。召天なさる4日前、21日は私に「おー豊ちゃん、気をつけて帰るんだよ」と声をかけて下さいました。

白根先生は私の人生においてかけがえのない恩師です。35年ほど前、仙台の教会での婚約式の日以来、長年支え続けていただきました。苦しんでいる時は話をひたすら辛抱強く聞いてくださいました。先生に対してほとんどできなかった恩返しを、他の方にさしむけることにしていきます。

「天国の白根先生へ」

梅谷道子

先生、お元気でいらっしゃいますか。清子先生や、先に逝かれた教会の方々とお逢いになられましたか？

本日は2月の最後の主の日です。教会学校に続いて礼拝を守り、昼食を共にし、午後は定期総会でした。

昼食は義輝先生はじめ新治先生のお身内の方々のご厚意で「鰻重」でした。先生も「うなぎ」大好きでいらっしゃいましたよね。皆さまと感謝して戴きながら「先生の

お宅に押しかけ、美味しいうなぎをご馳走になり、楽しいお交わりをしたこと、あったよね」などとの思い出話もはずみしました。思い出と言えば、ずい分いろいろな処へ連れて行っていただきました。沢山の教会、史跡巡り、霊園の清掃奉仕。老いや病で礼拝に出席できないの方々をお訪ねしたり、バザーや賛美の会にもご一緒させて戴きました。芋堀も楽しかったです。個人的には両親が大変お世話になりました。心よ

りお礼申し上げます。

ご自宅を開放されての集会から長い間の牧者としてのお働きの間には、ご苦労もおありだったことと思います。ことに晩年、床に伏せられていた時間はお辛かったこととお察し致します。でも、昨年末の二度の礼拝にお孫さんの助けを借りて、新会堂にお出かけ戴けたことは、教会員一同にとりまして本当に嬉しいことでした。先生もお喜びのご様子でしたね。今金沢文庫キリスト教会は小規模ではありますが、昔から先生とのお交わりのあった森島両牧師が、先生のご存命中から正牧師としてお立ちになり、私共を導いて下さっております。責任役員の方々も小さいこと

から、外部に大きく係わることまでお働き下さっております。どうぞ、ご安心下さい。

たった今先生のお顔が浮かび、お声が聞こえてきました。「わかってるよ。心配なのはすぐ『ダメだ』と、落ち込むお前のような者達のことだ。反省して祈れ!!そうでないともう『シラネー』ぞ。」「はい!!わかりました。」恵先生たちも「主を信じて祈りなさい」と励まして下さっています。残された一日一日を大事に歩ませて戴こうと思います。教会員一同を天よりお見守り下さい。末筆ながら、清子先生、井上さん、中川さんに宜しくお伝えください。

「白根先生、お疲れ様でした」 犬塚志朗

この世での私の一生の思い出は、1966年、故郷を遠く離れ、横浜の地に新しい教会捜しで迷っていた時、先生のご自宅を開放しての主日礼拝にお誘いを受けたこと。中高での新米教師の先輩としてのご配慮、一生の一大事：結婚式では白根牧師夫妻の司式と奏楽、式場探し、等々。以来、人生の岐路に立った時の叱咤激励。1972年釜利谷の地に教会堂建築、そして2014年まで牧師として、51年に亘って私をご指導下さったこと。さらに2017年、天寿を全うする前日、新会堂で一緒に迎えたクリスマスの礼拝、お帰り際にそっと握手した手の温もり。聖人君子としてではなく、親しみやすく身近

な、喜怒哀楽(怒は少し)豊かな伝道者として私たちを導き、静かに与えられた天寿を全うなさったお姿。介護ホームでお休みになっている時はいつも両手を胸元に組んで祈りの姿勢でいらしたことは、この世の旅人、寄留者(ヘブル11:13)である凡人の私が見倣いたい見本となっています。

社会で活躍している大勢の先生の友人・知人・教え子たちが私たちの教会を、そして新会堂建築を支えて下さっていたことも忘れません。

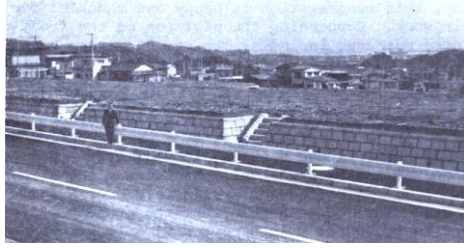
先生、この世でのお働き、お見事です。お疲れ様でした。

教会堂献堂のあゆみ

- 1957年に故白根新治牧師宅の一室を「金沢文庫いのりの家」として伝道開始
- 1963年金沢文庫伝道所となる



1971年4月3日 金沢文庫教会予定地見学



1972年会堂が建設され献堂式および森島牧人伝道師就任式が執り行われる



1975年に教会設立会議をもって金沢文庫教会となる



2011年3月の東北大震災を契機に旧会堂の老朽化と耐震性への懸念から補強工事や塗装補修をしつつ教会員の話し合いが積み重ねられる

2016年1月の責任役員会で新会堂建築が提案・決議される

教会懇談会新会堂コンセプトま

2017年2月の教会総会で建築計画（仕様、請負業者、資金計画など）承認

2017年2月28日、請負契約締結。同盟か大矢直人総主事、大矢和男理事出席。



ら

請負契約調印式



旧会堂での最後の礼拝
2017年4月23日

2017年5月11日、旧会堂解体工事開始
地盤も固い礫層のために、解体工事に一か月かかる



解体・整地に油圧ショベル活

2017年6月12日、(株)新昭和ウイ
ザース
との確定契約締結



16日起工式



2017年4月30日～12月3日；工事
中の礼拝は、関 東学院大学金沢文庫キャン
パスの教室、関東学院教会追浜チャペル、
教会役員の西山宅で主日礼拝を守る。また、
上郷森の家で主日礼拝、修養会実施



西山家での主日礼拝

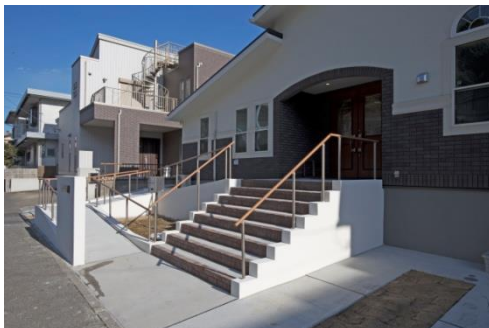


関東学院大学教室での主日礼拝



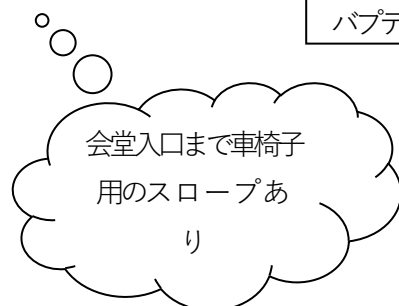
大学広場での歓迎会

2017年11月末 新会堂竣工



バプテストリー(浸礼浴)

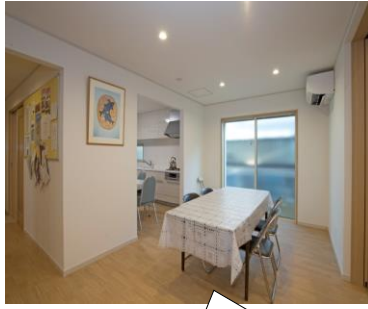
礼拝堂(右奥:牧師室、左奥:会議室・分級室) お花の下辺りがバプテス



会堂入口まで車椅子用のスロープあり



ホール入口の受付



ホール奥 いろいろなプログラムで活用



女性会設計
の台所

2017年12月10日より新会堂での主日礼拝開始



17日新会堂での最初のバプテスマ



クリスマス



燭火礼拝





29 日白根名誉牧師の教会堂での葬儀

1月28日 献堂式
喜びにあふれる
教会員



献堂式後の記念写真

